

アルバイト先での心理的居場所感と自尊感情、メタ認知的知覚の関連について

テーマ：発達と社会的行動

教養学部人間科学科

指導教員：井川純一

2055126 佐藤綾

問題

人が集団において、その場にとどまりたいと思うかどうかは居場所を感じられるかによって決まると考えられる。本研究では大学生のアルバイト先の居場所感に着目した検討を行う。正社員ほどの給与はなく、働く人の年齢層が幅広いアルバイト先は大学生にとって居場所として機能しているのだろうか。

中村・岡田 (2016) によれば職業生活における心理的居場所感は大きく役割感、本来感、安心感に分けられる。それぞれ、自分が役割を与えられているという感覚、ありのままの自分で居られるという感覚、この場所は安全であるという感覚である。これらの居場所感を高めることで精神的健康も高まることが示されているが (石本, 2010)、そもそもこの居場所感の高低には何が影響しているのだろうか。

居場所感に与える個人特性の一つとして本研究では個人のもつ自尊感情に着目する。Rosenberg (1965) は、自分が自分を尊重することや評価する程度と示し、特に、非常によいという他者比較における優越感ではなく、これでよいという自己受容的要素を自尊感情の対象としている。遠藤 (2006) は、自尊心の高い者ほど、脅威的経験の直後であっても、自己が他者から受け入れられる人間であるという信念が揺るがないことを示している。よって、自尊感情が高い場合自分は他者から受け入れられていると感じ、安心感に繋がったり、ありのままの自分で居ても大丈夫だという感覚が強まるのではないかと考えられる。

また、自尊感情と居場所の関係に影響を及ぼす特性として本研究で着目するのがメタ認知的知覚である。メタ認知的知覚とは、ネガティブな認知や感情を、距離を置きながら体験する過程であ

る (Teasdale, Moore, Hayhurst, Pope, Williams, & Segal, 2002)。メタ認知的知覚が強い者ほどストレスの生成が抑えられ抑うつ症状が弱く、コミュニティの成人に対して精神的健康への効果がある (村山・岡安, 2013) ことから、人間関係や仕事へのストレスが抑えられ、心理的居場所感の高まりに繋がると考えられる。

さらに、上述した心理的居場所感を感じるまでのプロセスには性差がある可能性がある。教育実習での居場所感に関する研究においては、実習班では女性の方が居場所感高まったことが示されている (三島・林・森, 2011)。しかし、中村ら (2016) の研究では居場所感に性差がみられないことも明らかにされている。そのため、本研究では大学生のアルバイト先における心理的居場所感の性差についても検討する。

目的

本研究では、アルバイト先における心理的居場所感と自尊感情、メタ認知的知覚の関連を明らかにし、性差による違いを検討することを目的とする。

仮説

- 1) 自尊感情が高い者ほど心理的居場所感が高い
- 2) メタ認知的知覚が高い者ほど心理的居場所感が高い
- 3) 自尊感情が心理的居場所感に与える影響は、メタ認知的知覚の高低によって差が見られる
- 4) 自尊感情やメタ認知的知覚が心理的居場所感について与える影響は、男女で差が見られる
- 5) メタ認知的知覚が心理的居場所感について与える影響は、男女で差が見られる

方法

調査参加者はアルバイトをしている大学生 90 名 (男性 38 名, 女性 50 名, その他 2 名。平均年齢 21.600 歳, $SD=2.534$ 歳) であった。アルバイトに従事する大学生 100 名程度対象に、クラウドワー

クス内で Google form を利用し web 調査を行った。調査票は回答者が概ね 15 分以内に回答できるように教示文、同意書及び以下の質問項目で構成した。調査参加者は性別、年齢等の個人属性について回答した後、職業生活における心理的居場所感尺度、ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版、メタ認知的知覚尺度に回答を求めた。

結果

研究に使用した各尺度について、先行研究に従い α 係数を求めた。職業生活における心理的居場所感尺度 (居場所役割感 $\alpha=.930$, 居場所安心感 $\alpha=.916$, 居場所本来感 $\alpha=.853$), ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版 ($\alpha=.859$), メタ認知的知覚尺度 ($\alpha=.900$) であった。十分な信頼を得られたため、平均値によって尺度得点を算出した。

また、仮説を検討するために、心理的居場所感尺度の 3 因子 (居場所役割感・居場所安心感・居場所本来感) を従属変数、自尊感情、メタ認知的知覚及びそれらの交互作用を独立変数として投入した重回帰分析を行った結果を Table1 に示す。

Table 1
重回帰分析の結果

変数名	居場所役割感	居場所安心感	居場所本来感
年齢	.176 *	-.077	.010
性別 (男性 0, 女性 1)	-.087	-.081	-.181
自尊感情	.659 **	.458 **	.485
メタ認知的知覚	-.003	.139	.173
自尊感情×メタ認知的知覚	.021	-.021	.017
自尊感情×性別	-.020	-.062	-.151
メタ認知的知覚×性別	.133	.231 *	.168
R^2	.515 **	.411 **	.480

** $p < .01$, * $p < .05$

自尊感情の標準偏回帰係数を確認したところ、心理的居場所感の全ての従属変数において、自尊感情における有意な標準偏回帰係数が認められた (居場所役割感: $R^2=.515$, $\beta=.659$, $p < .01$, 居場所本来感: $R^2=.408$, $\beta=.459$, $p < .01$, 居場所安心感: $R^2=.467$, $\beta=.487$, $p < .01$)。さらに、居場所安心感にのみ性別とメタ認知的知覚の交互作用における有意な標準偏回帰係数が認められた ($R^2=.408$, $\beta=.202$, $p < .01$) (Figure1)。

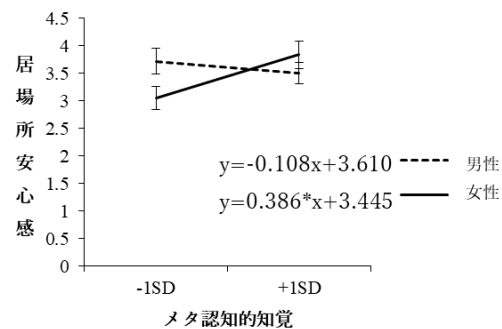


Figure 1 メタ認知的知覚と男女の交互作用が居場所安心感に及ぼす影響

考察

本研究では、自尊感情が高い人ほど心理的居場所感が高まること、メタ認知的知覚が高い女性の方がメタ認知的知覚が高い男性よりも居場所安心感が高まることが明らかになった。

自尊感情については、仮説で示したとおり自尊感情が高まるほど他者が自分を受容するという期待や自己受容が促進され、自分の役割感や安心感を覚えやすくなったり、ありのままの状態で繋がると思われる。一方、メタ認知的知覚と心理的居場所には関連が認められなかった。その要因として、心理的居場所感にはメタ認知的知覚によるストレスの低減の効果が少ないことが推察される。また、性差に関しては、メタ認知的知覚が高い女性の方が居場所安心感が高いことが示されたが、女性の方がアルバイト先の人間関係を重視し、それと同時に信頼感も高まるのではないかと考えられる。

前述のような結果を得られたことは大きな意義を持つが、アルバイト先の種類や勤続年数を限定したり、場面想定法を用いて様々な状況における心理的居場所感の変化を検討される必要性もあるだろう。

主要引用文献

中村准子・岡田昌毅(2016), 企業で働く人の職業生活における心理的居場所感に関する研究, 産業・組織心理学研究,30(1), 45-58